

おわりに

前川直哉（福島大学教育推進機構）

東北は、つねに周縁化された客体として語られてきました。東北やみちのくという地域名自体からも明らかなように、ある地点（中央を自称する地点）から見て東・北にあり、ある地点から訪れる道の奥に位置する。すなわち、あなたがいま暮らしているその土地は「中央」ではないのだ、と他者から名付けられた場所、それが東北です。

私の住む福島県福島市から見たら、東京が南であり西にある場所ですが、誰も東京を西南とは呼びません。主体と客体、まなざす側とまなざされる側、語る側と語られる側は非対称な関係にあり、逆転は許されない。2011年、東日本大震災により起きた東京電力福島第一原子力発電所の事故、東京や首都圏で使う電気を福島県双葉郡でつくっていたことから起きた事故は、この非対称な構造がもたらす歪みを露呈させたと言えるでしょう。

7年前、私は住み慣れた神戸の職場を辞して福島に転居しました。自分が「まなざす側」にいることに、すなわち中央と周縁の非対称な構造における「中央」の側で暮らし、物を言うことに、耐えられなくなったからです。福島はじめ東北の人たちは、私をあたたかく迎えてくれました。宮城県にお住いの、親しくさせて頂いている方の言葉がとても嬉しかったことを、今でも覚えています。「これで前川さんも、同じ東北人だね」。

東北に住み、暮らす一人として、東北を主語にした研究をしたいとずっと考えてきました。杉浦郁子さんが共同研究に誘ってくださり、たくさんの方にご協力頂いたお蔭で、今回の報告書をまとめることができました。本報告書のもととなったインタビュー調査の経緯は、杉浦さんが「はじめに」で書いておられる通りです。

* * *

私自身、ゲイ男性であり、性的マイノリティの一人です。そして私は研究者として、近現代日本における男性同性愛の歴史について調べてきました。

同性愛者は、「同性愛」という言葉が日本に輸入された大正時代からずっと、周縁化された客体として語られ続けています。しかし、決して当事者たちが主体性のない存在であったわけではありません。むしろ他者から与えられた「同性愛者」という名づけを利用しながら、目前の悩みを解決したり、より良き生を追求したりしてきた歴史もあります。また、「同性愛者」や「LGBT」「性的マイノリティ」の旗のもとに連帯し、差別・偏見と闘う際の抵抗の拠点とする場合もあります。それらの実践は、シスジェンダーの異性愛男性を中央に置き、女性と性的マイノリティを周縁化するような非対称な構造を疑い、揺るがしてきたと言えるでしょう。

ところが、こうした実践をよく知っているはずの研究者であっても、地域についての中央と周縁、東京など大都市圏と東北の非対称な構造については、これまで十分な注意を払ってきたとは言えません。私自身も含めての反省ですが、これまで日本の性的マイノリティ研究

の多くは大都市圏を対象としており、大都市圏と地方、あるいはそれぞれの地方の差異についての検証は、やや後回しにされてきました。地方の性的マイノリティは、二重の意味で「いないこと」にされてしまっていた、そして研究者もその不可視化に加担してしまっていたのではないかと、という思いが私にはあります。今回、東北の性的マイノリティ団体に関わる23名の方の語りを通じて、少しでもそうした状況を変えられたらと願っています。

私自身、インタビュー調査と編集作業を通じて、多くの発見と学びがありました。中でも大きかったことの一つは、「東北の性的マイノリティ」の一言で簡単に括ることはできない、様々な経験の違い・豊かさを改めて実感したことです。当たり前のことですが、東北の中でも、地域によって、世代によって、ジェンダーやセクシュアリティによって、何より個人によって、経験や考え方には大きな違いがあります。もちろん、似ている部分や、共通の課題として認識されているものもあります。

そうした内部の多様性や豊かさに気付くことで、「東北の性的マイノリティたち」が、顔を持ったそれぞれの存在として、皆さんの前に立ち上がってくるのかもしれませんが。少なくともこの報告書を通読して頂いた後には、東北の性的マイノリティを「いないこと」にすることも、「東北は〇〇だ」と安易に断定することも、できなくなっているはずです。

一人ひとりの、固有の経験や考え方の違いを認識し、尊重すること。それがあってはじめて「東北の性的マイノリティ」研究のスタート地点に立てると、今の私は考えています。

* * *

杉浦さんも書いておられる通り、本報告書は、東北の各地で地道な活動を続けてこられた皆さんのお蔭で刊行することができました。改めて、御礼を申し上げます。本当に有難うございました。

本来であればもう少し早くに刊行する予定でしたが、2019年秋の台風災害や、2020年初からの新型コロナウイルス流行に伴い、勤務校における業務が増加し、編集作業が停滞してしまいました。お待たせしてしまいましたが、ようやく皆さんのお手元に報告書をお届けすることができ、ほっとしています。この報告書が皆さんの活動の一ページを記録し、またお互いの活動を繋ぐ架け橋となれば、望外の喜びです。

共同研究者である杉浦郁子さんには、調査の基本設計から段取・編集に至るまで、たいへんお世話になりました。作業が遅れがちな私を見捨てずに励まして下さったこと、深く感謝しております。コロナ禍が落ち着いた後、再び杉浦さんと東北を巡り、食と酒を満喫する日が今から待ち遠しいです。

本研究は、JSPS 科研費 17H00978「多様性の経済学：帰納論的ゲーム理論の構築とその応用」の助成を受けたものです。研究代表者である松井彰彦教授(東京大学大学院経済学研究科)とスタッフの皆さんに、厚く御礼申し上げます。

2021年1月